

## 資料

# がん看護において一般病棟看護師が抱く感情に関する文献検討

穴水千尋 岩崎紀久子

淑徳大学看護栄養学部

## Literature review of emotions held by generalist nurses caring for cancer patients

Chihiro Anamizu, Kikuko Iwasaki

School of Nursing and Nutrition, Shukutoku University

### 要旨

**目的** 本研究の目的は一般病棟でがん患者に関わる看護師はどのような経験から消極的感情を持つのかということとを先行文献から概観し、その現状を明らかにすることである。また、一般病棟でがん患者に関わる看護師への支援のあり方を検討する。

**方法** 医学中央雑誌web版Ver.5を使用し、一般病棟でがん患者に関わる看護師がこれまでの経験のなかでの消極的感情に関する内容が含まれた11文献を分析対象とし、文献の研究目的と内容を照らし合わせながら精読し概要をまとめた。

**結果** 一般病棟でがん患者に関わる看護師は、告知に関連すること、終末期がん患者との関わり、肺がん患者との関わりのなかで消極的感情を抱いていた。また、複数の文献において患者の思いを尊重した看護が提供できない現状にも消極的感情を抱いていた。

**結論** 一般病棟でがん患者に関わる看護師がこれまでの経験のなかで抱いた消極的感情にはさまざまな要因があり、多くの看護師が患者の思いを尊重した看護が提供できない現状に消極的感情を抱いていた。患者と関わる時間を確保するための看護体制を整えていくことや看護師自身が経験を振り返り、がん患者の看護に生かしていけるような看護師への支援が求められる。

**キーワード：**がん患者、一般病棟看護師、感情、経験

**Key Words:** cancer patients, generalist nurses, emotions, experience

## I. はじめに

我が国において、がんは死亡原因として1981年以降第1位となっている。最新のがん統計によると、2017年のがんの部位別死亡数は、肺、大腸、胃の順に多いと報告されている（国立がん研究センター，2019）。また、がんの罹患数は現在も増加し続けており、国民の2人に1人は生涯でがん罹患し、3人に1人はがんで死亡する（厚生労働統計協会，2019）という現状である。このような現状から、がんは国民の生命および健康にと

って重大な問題であるということが理解できる。

医学の進歩に伴い、がん診療においてさまざまな治療が確立されているなかでも、がん患者は増加の一途をたどっており、多くのがん患者が一般病棟で療養生活をおくっている。一般病棟において看護師は、診断・治療期から終末期までプロセスとしてがん患者と関わる機会があり、看護師は患者のさまざまな感情に向き合いながら、心身ともに苦痛を伴う治療を乗り越えるという過程を患者と共に歩んでいる。

一方、一般病棟にはさまざまな疾患や異なった

病期の患者が入院しており、看護師は急性期患者と終末期患者のケアを並行して行わなければならないことや、それらの業務における詳細な時間調整が必要な場合がある。加えて、療養期間に携わったがん患者が亡くなった直後であっても、気持ちを切り替え、別の患者への対応をしなければならないなど、看護師の感情のコントロールや心の安定を求められることも多々ある。このような現状から、がん患者をケアする看護師には疲弊や葛藤が生じることがある。筆者自身もがん患者が入院する一般病棟で勤務していた際に、困難や戸惑いなどの消極的な感情を抱くことがあった。

がん患者の死亡場所は82.4%が病院（総務省統計局，2017）であることから、治療期だけではなく終末期がん患者の看護の中心は病院であるといえる。さらに、近年、緩和ケア病棟は増加しているが、450施設に満たない（日本ホスピスケア協会，2019）現状である。すなわち、多くのがん患者は一般病棟で治療期から終末期まで過ごしていると考えられる。また、小山ら（2015）は一般病棟に勤務し、がん患者に関わる看護師はさまざまな状況に悩み、自問自答するという気持ちのゆらぎが生じると明らかにしている。一方で、終末期がん患者に関わる一般病棟看護師の体験は自己を内省し、視野を広げ、臨床能力を向上させる中核になる体験である（名越ら，2005）と示されており、困難や戸惑いなどの消極的な感情をもつ経験や気持ちのゆらぎが生じる経験であっても、看護師の成長にとって大切な経験であるといえる。

そこで、一般病棟でがん患者に関わる看護師はどのような経験から困難や戸惑いなどの消極的な感情を抱くのかということ明らかにし、一般病棟でがん患者に関わる看護師への支援を検討したいと考えた。

## II. 研究目的

本研究の目的は、一般病棟でがん患者に関わる看護師はどのような経験から消極的な感情を抱くのかということを先行文献から概観し、その現状を明らかにすることである。さらに、一般病棟でがん患者に関わる看護師への支援のあり方を検討する。

## III. 研究方法

### 1. 用語の定義

感情とは、「精神の働きを知・情・意に分けた時の情的過程全般を指す。情動・気分・情操などが含まれる。主体が状況や対象に対する態度あるいは価値づけをする心的過程」と定義されている（広辞苑，2019）。

本研究では、「感情」を看護師が一般病棟でがん患者と関わるなかでの状況や対象に対して抱く困難、戸惑い、葛藤、ストレスなどの消極的な感情とする。

### 2. 文献検索

医学中央雑誌web版Ver.5を使用し、国内の文献検索を行った。検索は2019年9月に行った。2013年から2019年の文献を対象とした。まず、キーワードを「がん患者」「看護師」として検索を行った。そこから、「困難」「戸惑い」「葛藤」「ストレス」の4つのキーワードを掛け合わせて検索し、170件の文献を抽出した。抽出した170件の文献のタイトル、文献の概要を確認し、一般病棟看護師が研究対象であり、「困難」「戸惑い」「葛藤」「ストレス」などの消極的な感情における具体的な経験を記述している文献を選定した。なお、一般病棟看護師以外の緩和ケア病棟看護師や訪問看護師などを対象とした文献については除外した（表1）。

### 3. 分析方法

一般病棟でがん患者に関わる看護師がこれまでの経験のなかで抱いた消極的な感情について、分析対象文献（表1）の研究目的と内容を照らし合わせながら精読し、概要をまとめた。

## IV. 結果

一般病棟でがん患者に関わる看護師は、さまざまな経験から困難感、戸惑い、ジレンマなどの消極的な感情を抱いていた。本研究では、以下、4つの項目にそって、文献の概要を示していく。

1. 告知に関連する消極的な感情
2. 終末期がん患者と関わる看護師の消極的な感情

表1 分析対象文献一覧

著者(掲載年) 表題	① 研究対象者である一般病棟看護師の概要・数 ② 研究目的
1 市橋ら(2019) がん患者の全人的苦痛のアセスメントに対する一般病棟看護師の抱く困難感-がん看護の経験が2年以下の看護師へのインタビュー-	① がん看護経験年数2年以下の看護師5名 ② 一般病棟で働くがん看護に携わる経験年数が少ない看護師が、がん患者の全人的苦痛のアセスメントを行うのにどのような困難を感じているか明らかにすること
2 渡邊ら(2018) 看護師が感じた倫理的ジレンマの要因分析-肺がん患者との1事例を通して-	① 肺大細胞がんの患者に関わった看護師10名 ② 病状について十分な説明がないまま最期を迎えたのではないかと感じた肺がん患者1事例を通して、倫理的視点から看護師が感じたジレンマの要因と患者の意思に沿った治療に対して援助が行っていたのかを明らかにすること
3 野波ら(2018) AYA世代がん患者と両親に対する看護師の葛藤-告知から看取りまでの意思決定支援を振り返る-	① AYA世代のがん患者を担当した看護師5名 ② AYA世代のがん患者であるA氏と両親との関わりを振り返り、告知前から看取りまでにおける治療の場面において、患者と両親が対立した意思決定を示したことにより生じた葛藤と、葛藤を抱えながらも看護師がどのような意思決定支援を行っていたかを考察によって明らかにし、臨床におけるがん看護の質を向上するための一助とすること
4 松葉ら(2018) 余命告知に関する看護師の葛藤-余命を告知されないがん患者への看護で感じている困難感-	① 病棟に勤務する看護師3名 ② 余命告知の現状や病棟のがん看護に携わる看護師がどのような困難感を感じているのか明確にし、がん患者との関わりが円滑に行えるような糸口をつかむこと
5 菊永ら(2017) がん告知における看護師の困難感-根治治療が困難になったがん患者をめぐる3つのナラティブ-	① 成人のがん看護経験が3年目以上あり、病名告知後に根治治療が困難となった患者への病状告知・予後告知についての体験をもつ看護師3名 ② 根治治療が困難になったがん患者に対する告知についての看護師の困難感を明らかにすること
6 坂下(2017) 一般病棟で終末期がん患者の看取りにかかわる若手看護師の直面する困難の検討	① 臨床経験2年以上5年未満の看護師16名 ② 終末期がん患者の看取りにかかわる若手看護師の直面する困難を明らかにし、若手看護師の支援のあり方を検討すること
7 糸井ら(2015) 一般病棟で終末期がん患者をケアする看護師が感じるジレンマの内容とその対処方法	① がん看護を行ったことのある看護師11名 ② 一般病棟で終末期がん患者をケアする看護師が感じるジレンマの内容とその対処方法について明らかにすること
8 木村(2015) 一般病棟において終末期肺がん患者に関与する看護師の戸惑い	① 3年以上終末期肺がん患者の看護に携わったことがある役職につかない看護師11名 ② 一般病棟で終末期肺がん患者に関与する看護師の戸惑いを明らかにすること
9 植村ら(2014) 一般病棟における未告知のがん患者と関わる看護師の困難感	① がん患者に携わったことのある看護師75名 ② 一般病棟で未告知のがん患者と関わることで抱えている看護師の困難感について明らかにすること
10 大久保ら(2014) 肺がん患者の療養を支援する看護師が経験する困難	① 呼吸器系病棟に所属する看護師4名 ② 看護師が肺がん患者の看護を行う過程で経験している困難を明らかにすること
11 宮坂ら(2013) 呼吸困難がある肺がん患者と関わる看護師の苦悩	① 呼吸困難がある肺がん患者と関わったことのある病棟経験3年以上の看護師4名 ② 看護師が呼吸困難がある肺がん患者と関わるなかで、どのような苦悩があるか明らかにし、対応を検討すること

3. 肺がん患者と関わる看護師の消極的感情
4. がん患者に関わる新人・若手看護師の消極的感情

### 1. 告知に関連する看護師の消極的感情

一般病棟でがん患者に関わる看護師は、がん告知に関連する消極的感情を抱いていた。がんであるという病名告知がされていない（松葉ら，2017；植村ら，2014）という状況や、残された時間である余命についての告知がされていない（松葉ら，2017）という状況において、看護師はがん患者と関わることに困難を感じていた。また、がんであることが未告知の場合、患者からの問いの核心につけず、患者と向き合う自信のなさが生じ、困難感を抱いている（松葉ら，2017）ということも明らかにされていた。

看護師は、がんの根治治療が困難になったがん患者への病状・予後告知に同席するという経験においても困難を感じていた（菊永ら，2017）。さらに、AYA（思春期と若年成人）世代のがん患者と両親との関わりにおいては、患者の両親が告知をしてほしくない并希望する状況のなかで、看護師は患者に告知をするべきという思いがありながらも、踏み込めない現状に葛藤する（野波ら，2018）という経験をしていた。

### 2. 終末期がん患者と関わる看護師の消極的感情

一般病棟において終末期という病期にあるがん患者に関わる看護師は、消極的感情を抱いていた。木村（2015）は、一般病棟において終末期肺がん患者に関わる看護師の戸惑いについて明らかにしている。看護師は【多大な業務に追われる中での行き届かない終末期看護】そのものに戸惑いながら【対応困難な呼吸状態の変調】【病名や予後、死にまつわる患者・家族の対応困難な言行】【他職種・同僚による患者と家族への配慮に欠けた推奨・看護】などという日々の看護業務のなかで戸惑いを感じていた。また、看護業務以外においても、【長い間、看てきた患者の悪化していく状態と逝去】に対して患者の死後も長期間、戸惑いを抱き続ける経験をしていることが示されている。

糸井ら（2015）は、一般病棟において終末期

がん患者をケアする看護師のジレンマについて明らかにしており、看護師は医療者同士の意見の相違や医師の考えと患者の思いの相違、患者と家族の思いの相違など、がん患者を取り巻く人々の【方向性の相違】についてジレンマを感じていることを示している。また、患者とのコミュニケーションのみならず、医師とのコミュニケーションや症状マネジメント能力において【自己の能力と理想との相違】を感じ、【実際の終末期患者ケアと理想との相違】では、終末期がん患者のケアに時間をかけることができないという一般病棟ならではのジレンマを感じていることを明らかにしている。

### 3. 肺がん患者と関わる看護師の消極的感情

一般病棟において肺がん患者に関わる看護師は、消極的感情を抱いていた。最期まで治療を望む肺がん患者の事例から倫理的ジレンマの要因分析をした研究（渡邊ら，2018）では、治療の継続や緩和ケアにおいて患者の意思が尊重されていないと看護師個々が感じている一方、その価値観を表出することができていない状況にジレンマを感じていたということが明らかにされている。

宮坂ら（2013）は、呼吸困難がある肺がん患者と関わる看護師の苦悩について、【死に直結した苦痛・不安を見ている辛さ】【家族の意思と苦痛緩和のジレンマ】【セデーションをかけることの恐怖】【医師とのコミュニケーションに関する苦悩】などを感じていることを明らかにしている。また、看護師は何をしても取り除けない呼吸困難感などによる【対応困難な呼吸状態の変調】に戸惑い（木村，2015）ながら、肺がん終末期患者へケアを提供している。

大久保ら（2014）は、セデーション（鎮静）導入の判断や治療方針のギアチェンジへの支援など【治療】に関連した困難、【患者の状態】【患者とのコミュニケーション】【家族への対応】に関連した困難、【医師と患者の関係】【他の医療スタッフとの関係】に関連した困難を感じていることを明らかにしている。また、患者に感情移入してしまい、看護師としての判断が鈍るという困難も抱えていることを示している。

#### 4. がん患者に関わる若手看護師の消極的感情

一般病棟でがん患者に関わる若手看護師も消極的感情を抱いていることが明らかにされている。坂下（2017）の研究では臨床経験年数2年以上5年未満の看護師、市橋ら（2019）の研究ではがん看護の経験年数2年以下で臨床経験年数5年以下の看護師が研究対象者であった。一般病棟で終末期がん患者の看取りに関わる若手看護師は、患者や家族の苦しむ状況に感じる重圧や何もできない無力感、技術や知識の無さを痛感し、【未熟なケアを提供する中の困難】を感じていた（坂下，2017）。

市橋ら（2019）は、若手看護師はがん患者の全人的苦痛のアセスメントに対する困難感として、【制限された業務環境の中での優先順位の決定に対する葛藤】【知識・技術不足により患者の思いを尊重した看護を実現できない葛藤】などを感じているとともに、【患者の全てを尊重したい思い】を抱いていることを明らかにしている。

### V. 考察

#### 1. 一般病棟でがん患者に関わる看護師の消極的感情を抱く要因について

##### 1) 告知に関連する場面での関わり

一般病棟でがん患者に関わる看護師は、がん告知において消極的感情を抱いているということが先行研究から明らかにされた。がん患者への病名の告知の現状として、国立がん研究センターの院内がん登録全国集計の結果によると、告知率は94%に達している（国立がん研究センター，2016）。この統計結果より、現在は多くのがん患者に病名の告知がされていることから、看護師が告知に関して消極的感情を抱く要因には、告知の内容やタイミング、患者の年代などさまざまな要因が関連しているのではないかと考える。一般病棟においては、これから治療を受ける患者への説明や積極的治療が進む一方で、がんの進行により徐々に根治治療が困難になる患者もいることから、今後予測される病状変化や予後告知などの悪い知らせがなされる機会も多く、看護師の心理的負担は増すと考えられる。

#### 2) 終末期がん患者と肺がん患者との関わり

先行研究では、一般病棟でがん患者に関わる看護師は、終末期がん患者と肺がん患者への関わりにおいて消極的感情を抱いていることが明らかにされていた。一般病棟に勤務する看護師は日々の業務に追われるなかで、行き届かない終末期看護に戸惑い（木村，2015）を感じていた。一般病棟看護師は、さまざまな疾患や異なった病期の患者への看護ケアの提供、複数の業務が混在しているという環境のなかで、必要な看護を理解していても実践できない現状や、看護実践に至るまでの過程で重要となるコミュニケーションに時間をかけられないことから、困難感や葛藤など消極的感情を抱いていると考えられる。また、肺がん患者の疼痛は、胸膜や脊椎、脊髄、腕神経叢への浸潤など重篤な痛みであることが多く、オピオイド鎮痛薬だけでは管理困難な病態である（服部ら，2012）。肺がん患者に頻発する呼吸困難感患者にとって死への恐怖を感じる身体症状の一つであり、コントロール困難な身体症状に苦しむ患者と直接関わる看護師にとってもつらい体験であると推測される。さらに、患者の呼吸困難感を緩和するためのセデーション（鎮静）に対して恐怖を感じている（宮坂ら，2013）ことから、終末期がん患者や肺がん患者と関わる一般病棟看護師は倫理的葛藤も感じているといえる。

また、一般病棟でがん患者に関わる看護師は、長い間見てきた患者の悪化していく状態と逝去に対して、患者の死後も長期間、戸惑いを抱き続ける経験をしている（木村，2015）。看護師は、がん患者の診断・治療期から療養のプロセスを患者とともに過ごすという関わりをしている。患者との時間を大切にしたいと考えているからこそ、患者の状態の悪化や逝去に対して心理的負担を感じ、困難感や無力感、葛藤などの消極的感情を抱きやすいのではないかと考える。

#### 2. 一般病棟でがん患者と関わる看護師への支援について

がん患者に関わる一般病棟看護師はさまざまな経験から困難感、戸惑いなどの消極的感情を抱いているということが先行研究から理解できた。一

一般病棟看護師がとらえる困難感や戸惑いのなかには、患者に感情移入してしまうことで看護師としての判断が鈍る(大久保ら, 2014)という困難や、知識・技術の不足により患者の思いを尊重した看護を実現できない葛藤を感じていると同時に、患者の全てを尊重したい(市橋ら, 2019)という思いがあった。本研究において分析対象とした11文献は全て質的研究であり、研究協力者である一般病棟看護師は自らの看護を語り、振り返りたいと考えているのではないかと推測される。一般病棟看護師の体験は自己を内省し、視野を広げ、臨床能力を向上させる中核になる体験である(名越ら, 2005)ことが示されており、看護師は自己の経験を振り返ることで新たな気づきを得て、看護の視野を広げ、実践に発展させていくことができると考える。そのため、看護師が経験したことを自身で振り返り、看護の意味を問うことは重要なことである。しかし、日々の業務をこなすことが精一杯の新人・若手看護師などは、自己の経験を振り返り、自身が提供してきた看護と向き合うという過程が確立されていない可能性が考えられる。そのため、自己の経験に向き合い、それを看護ケアに生かしていくためには、看護チームのなかでそれぞれの経験を共有できるカンファレンスやリフレクションの機会を設けることが必要である。

さらに、がん看護における現状として、看護師ががん患者に関わる時間的余裕が少なくなり、それと同時に看護師自身が気持ちにゆとりが持てないと、患者への関わりも表面的なものとなり、患者と深い繋がりを築いていくことを妨げる危険性がある(森下, 2015)ことが指摘されている。このような現状にある一般病棟において、看護師一人ひとりががん患者と向き合う時間の大切さを認識し、病棟内で、患者との時間を大切にできるような組織・体制づくりをしていくことは、一般病棟看護師の困難、戸惑い、葛藤、ストレスなどの消極的感情を緩和し、がん患者に対して良質な看護ケアの提供を提供するための第一段階になるのではないかと考える。

## VI. 結論

一般病棟でがん患者に関わる看護師がこれまでの経験のなかで抱いた消極的感情に関する内容が含まれた2014年から2019年までに11文献を分析した結果、告知に関連すること、終末期がん患者や肺がん患者との関わり、若手看護師の経験に関して研究が行われていた。また、複数の文献において、患者の思いを尊重した看護が提供できない現状に消極的感情を抱いていた。患者と関わる時間を確保するための看護体制を整えていくことや看護師自身が経験を振り返り、がん患者の看護に生かしていけるような看護師への支援が求められる。

## VII. 利益相反

本研究において、記載すべき利益相反はありません。

### 文献

- 服部政治, 五十嵐妙, 寶田潤子(2012). 肺癌におけるがん疼痛管理. 医学のあゆみ, 240(13), 1210-1216.
- 市橋裕子, 新潟佳祐, 高橋直子(2019). がん患者の全人的苦痛のアセスメントに対する一般病棟看護師の抱く困難感-がん看護の経験が2年目以下の看護師へのインタビュー-. 北海道農村医学会雑誌, 51(1), 144-148.
- 糸井麻由美, 服部美景, 田中瑛子他(2015). 一般病棟で終末期がん患者をケアする看護師が感じるジレンマの内容とその対処方法. 京都府立医科大学附属病院看護部看護研究論文集, 2015, 1-8.
- 菊永敦, 宮坂道夫,(2017). がん告知における看護師の困難感-根治治療が困難になったがんの患者をめぐる3つのナラティヴ-. 医学哲学医学倫理, 35(1), 34-41.
- 木村美香(2015). 一般病棟において終末期肺がん患者に関与する看護師の戸惑い. 日本赤十字看護学会誌, 15(1), 39-46.
- 国立がん研究センターがん情報サービス(2016). 最新がん統計. がん診療連携拠点等院内がん登録全国集計. 令和元年10月10日アクセス,

- [https://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/brochure/hosp\\_c\\_registry.html](https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/brochure/hosp_c_registry.html)
- 国立がん研究センターがん情報サービス (2019). 最新がん統計. 日本の最新がん統計まとめ. 令和元年9月27日アクセス, [https://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/stat/summary.html](https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html)
- 厚生労働統計協会 (2019). 国民衛生の動向 2019/2020年, 東京, 厚生労働統計協会.
- 小山裕子, 森本悦子, 福井里美 (2015). がん看護に携わる看護師が体験したがん患者に接した際の「ゆらぎ」と対処. 関東学院大学看護学雑誌, 2 (1), 69-74.
- 松葉真実, 八木久美子 (2017). 余命告知に関する看護師の葛藤-余命を告知されていないがん患者への看護で感じる困難感-. 榛原総合病院学術雑誌, 12 (1), 67-71.
- 宮坂仁美, 石井三由紀, 池田奈保他 (2013). 呼吸困難がある肺がん患者と関わる看護師の苦悩. 長野赤十字病院医誌, 27, 61-65.
- 森下利子 (2015). 治療期にあるがん患者へのホリスティック・アプローチを基盤とするケア. 高知女子大学看護学会誌, 41 (1), 43-51.
- 名越恵美, 掛橋千賀子 (2005). 終末期がん患者に関わる看護師の体験の意味づけ-一般病院に焦点を当てて-. 日本がん看護学会誌, 19 (1), 43-49.
- 日本ホスピスケア協会 (2019). 緩和ケア病棟入院料関連. 緩和ケア病棟届出施設の推移・累計施設数. 令和元年11月28日アクセス, [https://www.hpcj.org/what/pcu\\_sii.html](https://www.hpcj.org/what/pcu_sii.html)
- 野波千晃, 岡林ひとみ, 牛窓帆乃香 (2018). AYA世代がん患者と両親に対する看護師の葛藤-告知から看取りまでの意思決定支援を振り返る-. 高知赤十字病院医学雑誌, 23 (1), 65-72.
- 大久保仁司, 山田忍 (2014). 肺がん患者の療養を支援する看護師が経験する困難. ホスピスケアと在宅ケア, 22 (1), 31-37.
- 坂下恵美子 (2017). 一般病棟で終末期がん患者の看取りにかかわる若手看護師の直面する困難の検討. 南九州看護研究誌, 15 (1), 31-38.
- 新村出 (2019). 広辞苑 第七版, 東京, 岩波書店.
- 総務省統計局 (2017). 人口動態調査. 死亡の場所別にみた主な死因の性・年齢別死亡数及び百分率. 令和元年11月26日アクセス, <https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003214730>
- 植村友香子, 尾崎正吾, 新開真知子他 (2014). 一般病棟における未告知がん患者と関わる看護師の困難感. 国立病院機構四国こどもとおとなの医療センター医学雑誌, 1 (2), 158-160.
- 渡邊麻利江, 丸山実穂, 小林里美他 (2018). 看護師が感じた倫理的ジレンマの要因分析-肺がん患者との1事例を通して-. 共済医報, 67 (4), 385-388.